

とかく世間というものは

「世間」考現学

吉田清彦

「それいゆ」の84年夏の催し「広かれ、おんなコミュニケーション」の一環として持たれたパネルディスカッション「自分らしい生き方のすすめ——結婚・仕事・暮らし方」にパネラーの一人として参加したが、会場から

ちよつと気になる発言があった。四十過ぎの女性であったが、「自分の娘がなかなか結婚しようとしなない、一体どういうつもりなのだろうか」というような内容だった。司会者の方から、「娘さんのことよりも、あなたご自身は結婚について、どうお考えですか」という質問が返されたが、あまり具体的な答えは返ってこなかった。

話は少し傍道に逸れるが、テレビの「デ・ビーズ」というダイヤモンドのコマーシャルに「娘の結婚式から帰ってきた女性に対して」母としての務めを終えた今日」というナレーションがかぶさるのがあるが、このコマーシャルには二つの「思想」

（「役割の押しつけ」が込められている。すなわち、「娘を結婚させる——嫁がせる」のは母親の「務め」である」ということと、「娘を嫁がせなければ、母親の「務め」は終わらない」ということと。

話を元に戻すと、会場で発言した女性は、このコマーシャルが提示する思想とほぼ同じお考えをお持ちと思われる。とかく世の母親は、娘がどういう考えを持ち、どういう生き方を（しようと）しているのか、ということをおわろうとするよりも、とにかく（「無事に」）嫁がせ（ることにより、「母親としての務め」を果し）たがるものであるらしい。未婚の女性のうち三七・五%もが「一人立ちできれば、あえて結婚しなくてもよい」と考えはじめているというのに。（数字は、総理府が84年5月、全国の二十歳以上の男女一万人を対象に面接して行った「婦人に関する世論調査」結果より）

「それいゆ」の催しからしばらく経った九月の下旬、今度は「ひとり歩きの会」の例会——その時のテーマは「妻の自立、夫の自立」——において、ほぼ同じような内容の発言にぶつかった。

「娘の友達で、大学生となり親元から離れて一人暮らしをしている女性がいるが、男出入りが激しいらしい。自分の娘にはそういうことをさせたくないで、手元に置いておきたい。結婚前の娘を抱える親として、そういうことを心配するのは当然の心情である」娘の友達がどういう生き方をしようと、私はとやかく言う気はないが、世間が許さない」

「それいゆ」の場合も、「ひとり歩きの会」の場合も、それぞれのテーマがいずれも「親であろうとなかろうと、親」としてではなく一人の人間として（女として、男として）どう（自分らしく・自立して）生きるか、「その中で、結婚」をどう位置づけるか」というものであったというのに、それぞれの発言者は、自分の生き方や結婚観を語るのではなく、（結婚前の）娘の心配をしか語ることができない。ここには、一人の人間としてよりも、母親という「役割」の中で物を見ることを強いられしてきた女の姿と、母から娘へという形で女が女の自立を閉じ込めていく日本の女の特異な

構造とが見事に読みとれるが、この問題はまた別の機会に詳しく論じてみたい。私が今こだわってみたいのは、「世間」という言葉とその使われ方である。

責任逃がれ、

隠れ蓑としての「世間」

「ひとり歩きの間」の発言者は、「私はともかく、世間がそれを許さない」と言った。「それいゆ」の発言者も、言外にはほぼ同じニュアンスを込めていた。

「私はともかく、世間は」という時の「世間」というのは一体何なのだろう。世の親が娘（あるいは息子）に対してよく使う、そしてその多くの場合「最後の切り札」として持ち出してくる「世間」。そして必ずといっていいほど「私はともかく」という前置きとワンセットで使われる「世間」という言葉の持つ仕組みと、そのからくりを説明しようというのが本文の目的である。

私自身も小さい時から、この「世間」という言葉をさんざん聞かされて育ってきた。多くは母親の言葉として耳に残っているが、たまには父親や身内の年長者、あるいは仕事関係の年長者が口にすることもある。例えば、「世間体が悪い」、「世間には通用しない」、

「世間さまに申し開きできない」、「世間に迷惑をかけぬよう」、「世間が許さん」などなど、と。

この「世間」という言葉を耳にする時、私はとても苛立つ。この苛立ちは、私が小さかった時よりも長ずるに従ってより大きくなってきているようだ。この苛立ちの原因は、この言葉が使われると反論のしようがない、というところにある。というのは、「世間」という言葉は実体があるようで、実は実体があるも曖昧模糊としているからである。実体があるようでない。実に捕まえるところがないのである。先年、勤め先の経営者と賃上げ問題をめぐる交渉をしていた時に、経営者から「そういう考えは世間では通用しない」と言われたことがある。いくらこちらの意見を主張して、相手の考えを論駁しようとしても、この「世間」という言葉の前には全ての論理は立ちすくみ、無に帰してしまふ。なぜかというと、「世間」という言葉を発した発語者は「世間」という煙幕の中に姿を隠してしまふ。あくまで「私」という主体を持った言葉で立ち向かわずに、「世間」という曖昧で捕まえどころのない言葉を使うのは、そこに主体を隠しくらませることができるからである。「世間」という言葉に必ず「私はともかく」

という言葉がくつつけられて使われるのは、そういう仕組みになっているからである。「世間」は、責任のがれのためのいい隠れ蓑である。論理的に相手を説得できない時、あるいは相手から論理的に追いつめられた時「世間」という言葉の力を借りることにより相手を立往生、いや煙に巻いてしまふことができる。発語者は「世間」という後ろ楯の向こうに姿をくらましてるので、相手は論理的に反駁しようがなくなる。立ち向かいようがない。

ということとは、この「世間」という言葉は、発する者にはとても便利な代物であり、その相手にとってはまことに理不尽極まりない。責任の所在をあいまいにする、すなわち責任逃がれの言葉としては実に重宝で、まさに「最後の切り札」としての効果は絶大である。

別の言葉に置き換えてみると

「世間」の姿が見えてくる

ところで、この「世間」という言葉に対して、たった一人で立ち向かうのは蝙蝠の斧かといえ、実はそうではない。からくりさえ見抜けば、実は相手は張りばての虎、案外に中身は脆いものである。「世間」という言葉を、別の（具体的な）言葉で言い換えさ

せればよい。

たとえば「世間が許さない」とか「世間の迷惑になる」という時の「世間」というのは、別の言葉に置き換えさせれば、それは少しずつ具体的な社会集団としての姿かたちを現わしてくる。たとえば、大は国家、企業(管理)社会から、小は地縁・血縁集団である親族・親兄弟や隣近所まで。そこでさらに言葉の置き換えを進めさせて、それでは具体的に、誰と誰とが「許さない」のか、「迷惑になる」のか、とまるで玉葱の皮を剥くように「世間」の皮を一枚一枚剥いでゆくと、結局最後の最後に正体を現わすのは、曖昧模糊とした「世間」の闇の中に姿を隠したはずの発語者本人である。結局「許さない」「迷惑になる」のは、「世間」という言葉を発した本人自身でしかない。

「許さない」のは、

「世間」ではなく、あなた自身

「世間」という言葉(を使うこと)のからくりについてもう少しこだわってみよう。「世間が許さない」とか「世間の迷惑になる」という言葉を使う時、その「世間」という言葉に込められたイメージは、発語者(例えば親なら親)が、自分が所属、あるいは帰属して

いると考えている(思い込んでいる)社会集団のイメージである。例えば「子供が三十歳にもなつて結婚しない」ことを、「世間が許さない」、あるいは「世間が迷惑」というのは、子供の行為が、親の所属・帰属している集団(血縁・地縁集団)のルール・規範を乱すことになり、その社会集団が「迷惑」をこうむり、だから「許さない」ということになる。すなわち、子供の行為は親が帰属する社会集団の掟や秩序を乱したことになる。

昔は、親も子供も全く同じ社会集団に属していた。大は「国家」(「おかみ」)から、小は地域共同体(「むら」)や「家」。そこには、その集団を統合する一人の長(天皇、村長、家長等)がいて、その他の人々はその長の下に仕える下僕であり、下僕は長の作った掟や秩序には絶対服従であり、その掟や秩序を乱さない限りにおいて利益(「おこぼれ」)を得て生活や生命を保持されていた。このような社会においては、掟や秩序を乱すことはすなわち生活や生命の危機に繋がる。従って当人のみならず、当人に列なる地縁、血縁の者達同士の相互監視へとエスカレートしてゆくのも否めない。すなわち「隣組」「五人組」の思想である。ここには、集団の一員(「駒」としての意識はあっても、自由で伸びやかであ

るべき一人の人間としての(個の存在としての)意識はない。

親が「世間」の名において子供の行為を監視あるいは規制・束縛するのは、すなわち、親が所属・帰属している(と信じこんでいる)社会集団から親自身が制裁を受け、排除されることを恐れているからに外ならない。親が「世間」の名を口にする時、それは親自身が自分の属している(と思ひこんでいる)社会集団(のルール・規範)に無条件の恭順の意を示そうとしているのであり、決してそれは子供の為ではない。子供が「世間」の規範に従わないことによって親自身がその社会集団の中で不利を被る、あるいは肩身の狭い思いをすると感じるからである。すなわち、「世間が許さない」とか「世間に迷惑」という言葉の本当の所は、親自身が困る、親自身が許さない、ということなのである。従って、「私はともかく世間が」という言い回しは、とんだ詭弁、真赤な嘘、ということになる。

もし親と子供との両者が所属する社会集団「世間」が完全に同じだとすれば、親の「心配」をあなたがち無視することもできないが、今の時代においては、親が帰属している(と思ひこんでいる)社会集団と、子供が帰属している社会集団とは明らかに食い違ってきて

いる。親が親の「世間」を楯にとり、子供にその親の「世間」のルールや規範を押しつけようというところに、すでにはじめから無理がある。

(べつに、子供が三十歳になって結婚していなかろうと、そのことで、親が多少肩身の狭い思いをするとしても、そのことを「世間」が(例えば隣りのおばちゃんや、学校の先生や、団地の自治会長が)、「許さない」わけでもないし、「迷惑」だというわけでもないし、また「申し開きをせよ」と言うわけでもない。親が「肩身の狭い思い」をするのは、おそらく世間の噂を気にするのであろうが、昔の「隣組」や「五人組」でもあるまい、直接「迷惑」になるでもなし、世間が寄ってたかつて結婚を強要するわけでもない。そんな世間の噂などを気にしはじめれば一事が万事、きりがない。我動ぜずと恬と構えていれば、世間の方から退散していくものである。)

もつと「世間」を広げてみよう

ここで、話をはじめに戻そう。

今、私達に求められているのは、いかに生きるか、ということである。それも、社会集団の「駒」としてではなく、一人の人間としていかに人間らしく、かつ自分らしく生き

るか、ということである。社会集団自体のありようが、昔のような、一人の長のもとにピラミッド型に縦につながる支配・服従の社会ではなく、自立した(自由で平等な)一人一人の人間が横につながり共生・連帯していく社会に変わってきている。今の時代において、もし「世間」という言葉を強いて使うとするなら、「世間」は、自分で(縦の関係ではなく、横に)作ってゆくもの、そして、自分で広げてゆくもの、といえよう。自分でない誰かが作り、押しつけてくる「世間」とやらの屈して、得体の知れない他人に迎合、帰順するのではなく、ましてやそれを他人に押しつけたりせずに、自分が主人公になって自分の「世間」(ヒューマン・ネットワーク)を自分の手でどんどん作りだし、横に広げていくことこそが大切なのである。

「それいゆ」や「ひとり歩きの会」などのサークルに出席して、「自分らしい生き方」について語り合うということも、自分で自分の「世間」を作り、広げはじめる一つの方法である。団地などで共通の問題を抱える者同志が話し合いの輪を広げてゆくのも自分が作り出す一つの「世間」(＝団地コミュニケーション)である。親は親自身の自分の「世間」を、子供は子供の自分の「世間」を作り、広げる

作業の中で、お互いの共通の「世間」が作り上げられることができれば、それにこしたことはない。「渡る世間に鬼はない」という言葉もある。